

草庵仏教

第155号
(発行日)
2003年5月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyuu3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《聞法会ご案内》
* 同朋の会 (念佛寺)
毎月22日午後2時
.....
* 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の同朋の会は休会

生活不安と仏法

C 「真宗の教えを信じるとどう
いう利益があるのですか」
D 「それについては聖人は『教
行信証』のなかで
〈金剛の真心を獲得すれば、必
ず現生に十種の益を獲。必
何者か十とする。一つには冥衆
護持の益、二つには至徳具足の
益、三つには転悪成善の益、四
つには諸仏護念の益、五つには
諸仏称讃の益、六つには心光常
護の益、七つには心多歡喜の益、
八つには知恩報徳の益、九つに
は常行大悲の益、十には
正定聚に入る益なり〉
とご教示されています」
C 「その部分を現代語訳してく
ださい」
D 「現代語訳は、〈金剛の信心を
得たなら、この世において必ず
十種の利益を得させていただく
のである。十種とは何かといえ
ば、一つには、眼に見えない方
々にいつも護られているという
利益、二つには、名号にこめら
れたこの上ない尊い徳が身にそ
なわるといふ利益、三つには、
罪悪が転じて善になるといふ利
益、四つには、仏がたに護られ
るといふ利益、五つには、仏が
たにほめたたえられるという利
益、六つには、阿弥陀仏の光明
に摂め取られて常に護られると
いう利益、七つには、心による

こびが多いという利益、八つに
は、如来の恩を知りその徳に報
謝するという利益、九つには、
常に如来の大きい慈悲を広め
るといふ利益、十には、正定聚
に入るという利益である」とな
ります」
*
C 「心多歡喜の益とはどういう
利益ですか」
D 「心に喜びが多いという利益
です。これについて龍樹菩薩が
『十住毘婆沙論』の中に、
〈初地の菩薩は一切の怖畏なき
がゆえに歡喜多し〉
と述べ、それに対して
〈怖畏なしというが、どのよう
な怖畏がないのか〉。
と問い、それにこたえて
〈不活畏、死畏、隨惡道畏、大
衆威徳畏、惡名畏、そのほかど
のような怖畏ももたぬ。それは
我、我所の心を離れるがゆえに〉
と述べておられます」
C 「怖畏というのは怖れですね。
怖れがあるから歡喜がないので
すね。そうするとこの怖れが無
くなるといふと人生生活に歡喜
が多いのですね」
D 「怖畏ことに不活畏、死畏、
隨惡道畏、大衆威徳畏、惡名畏
などの怖畏が無くなるといふと、
歡喜が生まれるといわれるので
す」

*
C 「歡喜というのは？」
D 「聖人は
〈歡喜というは、歡は、身をよ
ろこばしむるなり。喜は、心に
よろこばしむるなり〉
と仰せられています。身も心も
喜ぶ。聖人は阿弥陀様の大悲の
お心にふれると身心全体が喜ぶ
といわれます」
C 「阿弥陀様にであうと、人生
上のいろいろな怖れが無くなっ
ていって、身心すなわち私のい
のち全体に歡喜が生まれてくる
といわれるのですね。ありがた
いですね」
D 「ええそうです。今日の私た
ちの一番願っているものはいの
ち全体の喜びだと思えます」
*
C 「龍樹菩薩のお言葉では、不
活畏・死畏・隨惡道畏・大衆威
徳畏・惡名畏などの怖れがない
から歡喜が多いとのことですが、
まず不活畏とは何ですか」
D 「生活の怖れ、いわば生活不
安のことです。今日も多くの人
々が生活不安を感じています」
C 「なぜ菩薩には不活畏の怖れ
がないといわれるのでしょうか」
D 「これについて龍樹菩薩は
〈大威徳あるがゆえに、よく堪
受するがゆえに、大智慧のゆえ
に、足るを知るがゆえに、不活
畏の怖れがない〉
と説いておられます」
*
C 「大威徳あるがゆえに」とは

どういうことですか」
D 「迷いの世界を超えてた菩薩
はおのずから法の福徳が身に付
いているから、食べることに心
配しないということだと思いま
す。菩薩には菩薩を供養に値す
る法の福徳が身に付いている。
それは真理の光が菩薩の上に輝
いているからです。真理の権威
そのものが菩薩の生活を護る。
求めずともそういう菩薩には人
々が施しをするのですね。それ
は菩薩がいただいた法の徳ゆえ
です。その法の威徳を感じてい
るから菩薩には不活畏がない。
そういわれるのではないでしょ
うか」
C 「法の真理の光を浴びている
人は、その真理そのものがその
人の生活を護る。こうした真理
の力を感じるから菩薩には生活
不安がないのですね」
D 「そう理解しています。この
ことは特別勝れた菩薩だけのこ
とではなくて、真宗の信者さん
にも言えないことはないと思ひ
ます。まことの信心に生きた人
たちの生涯を見ますと、本人は
自分の方から生活の糧をあえて
求めようとがんばらなくても、
おのずからその人を喜んで援助
しようとする人たちができてく
る。それはその人の個人的な才
能からではなくて、本願念佛の
真理の威徳によつてです。仏法
の真理の力を感じている人は、
生活の不安は少ないと思います。
真宗の信者は凡夫ですし、我愛

の心はありますから当然、生活不安が全くなくなることはないでしょうが、しかし法の徳の力を信じているゆえに生活不安は「ずいぶん少ないと思います」

C 「仏法の大威徳を感じて生きている人には生活不安が少ないのですね」

D 「私の知っているKさんは貧しいお方で独身のうえ親戚もな無人でしたが、お念仏をととても喜ばれていました。晩年は老人ホームに入りましたが、Kさんをしたう人が次々と訪れ、喜んで生計を援助していききましたので、生活に困窮することはありませんでした。又、あの有名な庄松同行も独身で大変貧しい人でしたが、最晩年になって寝込まれたときも庄松さんをしたうお同行さんたちが喜んで世話をされました。これは仏法そのものに徳があるからだと思えます。その威徳を感じて生きる人には生活不安は少ないと思います」

*
C 「では次に（よく堪受するがゆえに）とは」

D 「これはあとの（足るを知るがゆえに）と深く関わっていますので、一緒にここで説明します。よく堪受するとは苦勞や困窮に耐えることで、菩薩の場合はいくまでもなく念佛の信心をいただく、少々の貧窮に耐えていきましようというエネルギーを感じてきます。そうすると

将来生活がもっと苦しくなるときがくるかもしれないけれども、阿弥陀様と共なら耐えていきましようという力が湧いてきます」

C 「もう少し具体的に言ってください」

D 「たとえば、今は高い家賃のマンション暮らしをしているけど、将来収入がへって家賃の安い住宅にひっこしをせねばならなくなるかも知れないが、そうなるかも知れない。また着るものも新しいのが買えなくて古いものでも結構、食べ物は粗末でもかまわない、受けとめていきましようという気持ちで湧いてきます。大体、将来の生活を不安に思うのは、今よりも経済レベルを下げた窮屈な生活を強いられる不安でもあります。極端かも知れませんが、たとえ生活保護を受けるようになっても、それに耐えていこうという力で、す。こういうのが（よく堪受する）ということ、いわば苦勞を引き受けていこうというエネルギーは如来大悲からあたえられます」

C 「それと先ほどの（足ると知るがゆえに）とはどういう関係ですか」

D 「たとえ貧しい生活をして、足るを知り、人生に満足することができるなら、苦勞に耐えることができるのではないでしょう。か。そういう例は無数にあります。阿弥陀仏にであうと人生全体に大いなる満足感が与えら

れます。そうするとたとえ生計が窮屈でも不幸や不満を感じません。そればかりか、何とか生きれたらそれで満足、貧しくても甘受していこうという力が湧いてくるのでしよう。ですから将来に生活不安がずいぶん少なくなるのだと思います」

*
C 「大智慧のゆえに」とは？」

D 「ここで智慧とは仏の智慧です。菩薩もそうですが、念佛の信心には仏の智慧の徳がこもっています。智慧は物事を見る眼として私の全生活に働いてくださいます。智慧でものごとを見るのです」

C 「どのようなものごとを見るのですか」

D 「智慧の働きの中心は転悪成徳（悪を転じて徳と成す）のまなこだといえましよう」

C 「転悪成徳とは？」

D 「悪とは善悪の悪ですが、また不幸の不幸、良悪の悪、禍福の禍を意味します。その（悪）が（徳）という意味に変えられるのが智慧の働きです」

C 「転悪成徳の智慧があるから、不活畏がないと言われるのですね」

D 「そうですね」

C 「なぜですか」

D 「貧乏を不幸と考え、そうやっては困ると考える、そういう考えが、（貧乏もまたよし）と見られてくる、そういうのが転悪成徳の智慧だといえましよう。

禿頭 誠師は

（居は金殿にあらざとも漏れねばよし、服は錦にあらざとも暖かなればよし、食は珍膳にあらざともひもじからねばよし。およそ衣食住とも心になわぬがかえってよきことなり。心にかないたらんには、我らがごとき不覚人は必一定執着するであらう）

と言われています。生活が裕福になつて気楽になると、私のよな道心の浅いものはこの世の生活に執着してしまい、浄土を願う心も弱くなつて仏法をおろそかにしてしまふ。かえつて衣食住は乏しいぐらいがちょうど良いといわれるのでしよう。こういうものの見方の中に智慧が働いています」

C 「この世でのマイナス価値が仏法から見るとプラス価値と受け取られる、こういうのを悪を転じて徳と成す見方だといえるのですね」

D 「そう思います。私のきわめてささやかな経験ですが、昔、ヒマで生活費も乏しい時、将来の生活に不安を感じ、心細い思いをしました。その時、（ヒマな時は時間がたつぷり与えられたのだから、このときにこそしっかりと仏法を勉強せよとの仏様の思し召し、忙しい時はこれで生活してゆけよの思し召し、どちらもあり難い」と、そうただいて暮らしはじめました。そうすると不安も少なくなつて、ヒ

マで収入がないのを嘆くこともありませんでした」

C 「マイナスをプラスに見る智慧によつて生活不安が少なくなるのですね」

*
D 「また不活畏の怖れが一番も

とに死畏という死への怖れがあります。（食えんようになつて飢えて死ぬのではなかるうか）という怖れです。これは不活畏の不安にいつもともなつてい

ます。ですから死への不安がなくなつていくことが同時に生活不安がなくなつていくことにもなるのです」

C 「そうすると、念佛往生の道を歩むことによつて死への不安がのぞかれていき、広大な仏法の徳に信賴し、貧しさに耐え、わざわいを良きことと見る信心の智慧をいただき、生計が十分でも足るを知つて生きるならば、不活畏という生活不安もずいぶん少なくなつていくということではしようか」

D 「ええ、そう思います。仏法なしに収入の多寡だけで人生生活安定させようとしてもほんとうにはできないことです。念佛の信心は現実の不安を除いていく力をもつてい

ます。いくつ

かの怖畏の中で今回は不活畏を中心にお話ししました。また機会があれば、ほかの怖畏についてもお話ししたいこと

歎異鈔 第十三章第四講

そのかみ邪見におちたるひとあつて、悪をつくりたるものを、たすけんという願にてましますばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをい

いて、ようように、あしざまなることのできこえそうらいしとき、御消息に、「くすりあればとて、毒をこのむべからず」と、あそばされてそうろうは、かの邪執をやめんがためなり。まったく、悪は往生のさわりたるべしとはあらず。「持戒持律にてのみ本願を信すべくは、われらいかでか生死をはなるべきや」と。かかるあさましき身も、本願にあいたてまつりてこそ、げにほこられそうらえ。さればとて、身にそなえざらん悪業は、よもつくられそうらわじものを。

(歎異鈔第十三章)

現代語訳(かつて誤った考えにとらわれた人がいて、悪を犯したものを救いださるといふ本願であるからと、わざわざ悪を犯し、それを往生のための行いとしなくてはならないなどといひ、しだいにそのよくない噂が聞こえてきました。そのとき聖人がお手紙に、「いくら薬があるからといって、好きこのんで毒を飲むものではない」とお書きになられましたのは、そのような誤った考えにとらわれているのをやめさせるためなのです。決して悪を犯すことが往生のさまたげになるというのではありません。

「戒律を守って悪い行いをしない人だけが本願を信じることが出来るのなら、わたしどもはどうして迷いの世界を離れ

ることが出来るだろうか」と、聖人は仰せになつています。このようならななものであつても、阿弥陀仏の本願に出会わせていただいでこそ、本当にその本願を誇り甘えることができるのです。だからといって、まさか自分に縁のない悪い行いをする事などできないでしよう。

*

大体この十三章は、へ不思議な弥陀の本願に助けられると思つても悪をつつしまなければ往生はできないのだという異義を嘆かれ正されたものです。

唯円房がこういふことを問題にされた背景には、聖人のお手紙に

「煩惱具足の身なれば、こころにもまかせ、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいふまじきことをもゆるし、こころにもおもうまじきことをもゆるして、いかにもこころのままにあるべしともうしおうてそうろうらんこそ、かえすがえす不便におぼえそうらえ。」

というように「悪をつつしむ」ことをおさとしになつていふような個所があります。これは悪をつつしまなければ浄土の往生は出来ないという思召しではなくて、聖人在世のころ、

「そのかみ邪見におちたるひとあつて、悪をつくりたるものを、たすけんという願にてましますばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをい」つて人々を惑わすような人々がいることが聖人の耳に入つて、こうした邪見を批判されて、

「くすりあればとて、毒をこのむべからずと、あそばされてそうろうは、かの邪執をやめんがためなり」

（往生のために悪をことさらになす）とか（往生のためには悪をつつしむ必要はない。自由にふるまえばいい）というような誤った考えを正されるために、不思議な本願がましますからという理由で悪をこのむのは間違いであると正されたのであつて、へ本願を信じて悪をつつしまなければ往生はできない」と聖人は申されているのではないと、唯円房は仰せられるのです。

*

一方で、悪をつつしまなければ本願を信じて往生は出来ないとか、また一方には往生のためには悪は邪魔にならぬどころか往生の業(種)になるのだという、どちらも邪見ですが、どうしてこのような間違いが起るのでしょうか。

それは一言で言えば、弥陀の本願を自らの苦悩を離れて、自我の知性で受け取るからだと思ひます。

*

本願を思想として自我の知性で受け取れば、「私はこのままでいいんだ」といふ自然主義か、「私はこのままでいいけない。何とかならないとだめだ」という理想主義か、どちらかになります。

「このままでいい」と自分が自分にいいきかせるか、あるいは「このままの自分ではダメだ。もう少し何とかならねば」となるかどちらかです。「私はこのままでいい」といふことが更に「悪は思うさまにふるまえばいい」となり、それがやがて「悪はかえつて往生のためになるのだ」といふような偏つた邪見になつてしまふのでしよう。

*

およそ弥陀の本願は自らの煩惱を悲しみ、悪を離れたくても離れえず、善をな

そうとしても、思うようになしえずに悩んでいる者に対して、「極重悪人よ、唯だ我が名をとなえよ」(極重悪人唯称仏)と喚びかけたもう仏心大悲であります。

このおもいがけない仏心大悲を聞いて、ほればれと弥陀の誓いに、罪悪深重の身をゆだねている。信心と言うも大悲の仏心に浴している外にはありません。まことに「我が名を称えよ」の仰せは我が身の全分を受容したまひ、罪のありだけを浄化しようとの誓いであり、浄土へ生まれさせるとの大悲の約束であります。

弥陀の本願はいまこゝ、いまこの私に、そのつど仰せ下さり、喚びかけて下さる、常に新鮮なみ言葉であり、「助ける、引き受ける」の仰せであります。この仰せを聞かせていただく。そこに大悲が私に流れ、満ち足りてくるのです。

*

ところがこの不可思議な大悲の誓願をただ聞き、ただ称え、ただたのむのではなくて、「弥陀の本願は罪悪の深い者で罪悪のあるまま救はたらきである」といふような本願思想とか概念的な教義で受け取つてしまふ。そうなるともはやそれは直接的な仰せではなくて、本願にたいする(知識)になつてしまふのです。それは本願そのものではなくて、本願の抜け殻、いわば本願のカゲです。思想的につかんだ本願には驚きはないし、繰り返されて「そんな話はどうなんでも聞いたこと」といふマンネリ化がはじまります。

*

さて、「弥陀の本願は罪悪深重な者を救はたらきである」と単に知性で受け取りますと、「どんな悪を犯しても阿弥陀様は救つてくださる」といふ自己免許、

さらには「悪人こそ救われるのだから、浄土に生まれるためには悪は気にしなくていい」ともなり、へたをすると「悪を作った方が往生のためにはよい」などという全くの間違った考えに陥ることもあるのです。

聖人のおられたころも、こういう極端な邪見が吹聴されたようです。聖人のお手紙に

「不可思議の放逸無慚のものどもに、悪はおもうさまにふるまうべしと、おおせられそうろうなるこそ、かえすがえす、あるべくもそうらわず。」とか

「往生にさわりなければとて、ひがごとをこのむべしとは、もうしたることそうらわず。」

というお言葉から察知されます。

*

さて、弥陀の本願を聞いて「どんなに罪を犯しても、阿弥陀様の本願は罪のあるなしにかかわらず救うてくださる」という、そうに違いがないけれども、それを盾にとつて「悪をおそれる必要はない」「悪を為してもかまわない」というような自らの悪を弁護する人たちがでてきたのであります。こうした邪悪な考えを批判されたのが聖人の「くすりあればとて、毒をこのむべからず」という思召しでした。

人間はいつの時代でも、自分の悪を認めることはせず、自らの悪を認めても居直ってしまうという、どこまでも自我を固執し肯定しやすいのです。

他者とか社会を批判することは盛んにやりますが、自らの悪を批判し悲しむことはなかなかしないものです。

どこどこまでも自我を肯定したいという我執我愛の根性は自らの中に深く深く

潜んでいて、何かにつけて現れてくるのを感じます。自からの中にも弥陀の本願を盾にとつて、自分の悪を弁護し、許そうとしているあさましさを感ぜずにはおられません。

*

阿弥陀仏は我らの「善をほめたまい、好みたまい、悪を嫌いたまう」のです。しかし同時に、弥陀は我らの悪にもかかわらず、大悲深きゆえに、「汝、極重の悪人よ、汝の往生は私が受け持つ。我に任せよ見捨てぬぞ」と喚びかけて下さるのです。ここで「悪は往生のさわりたるべしとはあらず」と仰せられるのはそれでありませぬ。

もし「持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきや」で、戒律を実践すれば本願に預かれるとか、慈悲の行いをすれば本願に救われるとか、施しを行えばこそ本願に助けられるというような、善行や徳行をそえてのみ本願を信じて助けられるというのなら、私たちのような善を自由になしえず、悪を自由に制御できない者はどうして迷い苦しみを離れていくことができようか、と唯円様は教えてくださいます。

*

自分のどうしようもなさに気がつかず、しかも自己の悪を悲しむことも、悩むこともない、そういう人に弥陀の本願はなかなか聞こえないように思っています。

ただしかし、どれほど仏法を聞いても、悪も知れず、自分の助からなさも知れず、弥陀の本願をちつとも聞くことの出来ない、全くの無仏法の者（闡提）であるとしみじみと我が身の愚鈍が知らされる時、はからずも今までちつとも聞こえなかった弥陀の本願の光が地獄のその自

分に届いていることに驚嘆する、それは不可思議な大悲の事実です。

*

「かかるあさましき身も、本願にあいたまつりてこそ、げにほこられそうらえ」

かかるあさましき身というのは、唯円様ご自身のことをまづ言っておられるように思います。自分を「あさましい身」であると感じて、しかもそのあさましさを離れることが出来ない身であると。それは宿業の身だからといわれるのでしよう。過去の業ことに悪業の集積が今の自分の行いを束縛してしまつてドウしようもなくなっている。こんな我が身は阿弥陀仏の本願をよりのみ、本願の慈悲にすがり、本願の慈悲に甘えるより外に救われようもないとのお心。それが「本願にあいたまつりてこそ、げにほこられそうらえ」というお言葉から感じられます。

*

己を宿業の身と感ずることは他者の姿の上にも宿業を感じます。人が自分勝手な振る舞いをしたり、時には犯罪を犯す。その当人にもどうすることもできない宿業の姿を見、我も人も共に大悲に救われべき身であると知らされます。

人間は宿業的人間として平等なのでしよう。ともに宿業的人間であり、宿業に縛られて生死を流転している人間であります。そういう我らに平等なる大悲をかけてくださり「汝ら衆生、浄土に生まれることができるとおもつて、念佛してきたれ」と喚びかけたもう弥陀の誓願がましますのです。

(了)